上古漢語の接続詞「故」の談話機能とその特徴

人文社会系研究科中国語中国文学専門分野博士課程三年
三村一貴

【要旨】上古漢語の接続詞「故」は、一般に因果関係を表すと理解されているが、前後に因果関係を認めがたい文脈でも「故」が用いられていることがある。本研究では、「故」の出現する談話の情報構造や、論理展開・話題の推移に注目し、「故」の用法が垂直的導出と隣接的導出の二つに分類できることを示す。垂直的導出の「故」は因果関係を表す文法機能のほか、後件の事柄を強く押し出し、対者を説得する談話機能を持つことがある。隣接的導出では、共通の話題や平行的構造を有する段落を導出し、議論を展開する談話機能を持つ。本研究の整理により「故」の機能に関する簡要な図式が得られたことになる。

キーワード：故　接続詞　因果関係　談話機能　情報構造

1. 問題の所在

まず、次の文を読まれたい。

(1) 凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。**故**兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天地之災[①]、將之過也。（『孫子』地形）

この文章を Ames 1993:149 は次のように翻訳している。

(2) Now these are the six guidelines (*tao*) governing the use of terrain. They are the commander's utmost responsibility, and must be thoroughly investigated.

In warfare there is flight, insubordination, deterioration, ruin, chaos, and rout. These six situations are not natural catastrophes but the fault of the commander.

（さてこれらは地形の活用法を左右する六つの導き（道）である。そ

れは司令官の最大の責任であり、完全に精査されねばならない。／戦闘には疾駆、反抗、劣化、崩壊、混乱、潰走が存在する。これら六つの状況は自然災害ではなく、司令官の過失である。）

原文の「故」は訳出せず、段落を改めている。この箇所の注には次のようにある（p.294）。

(3) I have not translated the *ku* at the beginning of this passage as “therefore,” taking it to be simply a passage marker.
（私はこの一節の始めにある「故」を「ゆえに」とは翻訳せず、単純に談話標識と見なした。）

「故」に先行する部分の内容を考えても（「六者」は「通」「挂」「支」「隘」「險」「遠」を指す）、確かにこの「故」を therefore と翻訳することは難しい。それではこの「故」はいかなる機能を担っているのであろうか。

さらに次の例を見られたい。

(4) 孫子曰、凡用兵之法、全國為上、破國次之。全軍為上、破軍次之。全旅為上、破旅次之。全卒為上、破卒次之。全伍為上、破伍次之。**是故**百戰百勝、非善之善者也。不戰而屈人之兵、善之善者也。**故**上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。攻城之法、為不得已。修櫓轒轀、具器械、三月而後成。距闉、又三月而後已。將不勝其忿、而蟻附之、殺士三分之一、而城不拔者、此攻之災也。**故**善用兵者、屈人之兵、而非戰也。拔人之城、而非攻也。毀人之國、而非久也。必以全爭於天下、**故**兵不頓、而利可全。此謀攻之法也。（『孫子』謀攻）
（孫子が言う。一般に、戦争の原則は、敵国を完全な状態で降伏させるのが最上であり、敵国を打ち破るのはそれに劣る。敵軍・旅団・大隊・小隊を完全な状態で降伏させるのが最上であり、それらを打ち破るのは劣っている。従って、百戦百勝するのは最善ではない。戦わずして敵軍を屈服させるのが最善である。そのため、最上の戦争は敵の謀略を討つことであり、その次は外交関係を、その次は軍隊を討つことであり、攻城戦は最下等である。攻城という手段はやむを得ず行うものである。櫓や四輪車の整備、攻城の器械の準備は三箇月を費やしてようやく完成する。土塁を築くにはさらに三箇月

を要する。将軍が憤怒の情に堪えず士卒を敵城にまとわりつかせ、兵士の三分の一を失ってもまだ城が攻略できないなどは、攻城戦の弊害である。そのため、戦争に長けた者は、敵軍を屈服させるが戦闘するわけではなく、敵城を攻略するが攻城戦をするわけではなく、敵国を滅ぼしはするが長期戦を行うわけではない。必ず無傷のまま敵を我が手中に収めるという方法で勝利を天下に争うため、自軍は疲弊せず、完全な利益を得られる。これが謀略によって攻めるという方法である。）

これについて平田 2009:153-154 は以下のように述べている[②]。

(5a) この段落は、短いなかに「是故」「故」が四回も連続して使われている。もし、いちいち「だから」と日本語訳すると非常にくどい。第 I 部第一章でもふれたとおり、「故」の多用は、戦国時代の文献によくみられる特徴である（兪樾『古書疑義挙例』四〇）。こうした「故」は、新しい文章のまとまりがそこから始まることを示している場合もあるように思う。だまって改行だけしておくのが、いちばんふさわしいかも知れない。

兪樾 2005[2]:66-67 の説明はこうである。

(5b) 古人之文、毎以「故」字相承接、似複而實非複。〈…〉若此之類、並於一簡中疊用「故」字、「是故」字、「故曰」字、彌見古人文氣之厚。（『古書疑義挙例』四〇）

（古人の文は、常々「故」字でつないでゆくが、これは重複のようでいて実は重複でない。〈…〉このような例はどれも一段の中で「故」「是故」「故曰」を重ねて用いており、古人の文勢の重厚さがますますよくわかる。）

以上見来たったように、「故」に関し、因果関係を表示する接続詞と捉える通常の理解では解釈の困難な例が存在することは、先学の注目する所であった。本研究は、「故」が畢竟いかなる機能を有しているのかを突き止め、「故」の全体像を見渡せるような図式を提供することを目的とする。なお、本研究では「是故」「故曰」も「故」と区別せず扱う。また、長い例文は下線を施した部分のみの翻訳に留めることがある。

2. 先行研究

本節では「故」が従来どのような語として扱われてきたかを確認する。

2.1『馬氏文通』（马建忠 1898/1983）まで

王引之『経伝釈詞』（pp.115-116）は「事を敷衍する」機能を認め、また「則」と同義となる例を指摘する③。

俞樾 2005[2]:81・马建忠 1898/1983:308-309 は「上を承ける」「下へ続ける」機能のほか、「発語の辞」として用いられる例を挙げている④。古くは『文心雕龍』も「発語の辞」と見なしている⑤。

2.2 現代の研究

楊樹達 1928/2004:97-101 は「発語の辞」としての機能、因果関係表示機能を認めるとともに、「則」と同義となる例を挙げている。

张赪 2014 は『荀子』を資料とし、「故」の談話機能を詳細に分析して以下のように主張している。

・「故」は複数の文のまとまりの始めに置かれ談話を連結する働きを持つ。

・「故」によって連結される成分の関係性は大きく順接・逆接・転接の三つに分けられ、さらに細かく因果・順承・挙例・解説・換言・対比・転題の七つ⑥に分けることができる。

・複数の文のまとまりの始めに使われた「故」は、上記七類すべてについて用例を提供しているが、文と文とを連結する場合は、因果・順承の機能しか観察されない（p.31）。

・「故」が連結する両成分が長大となり、構造が複雑になるにつれて、両成分の意味上の関係性が薄れ、「故」は談話連結成分となるに至った（p.33）。

张赪 2014 は有用な用例を多数挙げているが、なにゆえ「故」が上記七種の機能を担いうるのか、それらの機能は相互にいかなる関係を持つのか等のことにつき、十分に明らかにされていない憾みがある。

张亚茹 2016 は『左伝』を「叙事語体」の、『荀子』を「議論語体」の例とし、この二つの文体において「故」がどのように用いられているかを分析している。その際、文中の位置・語義関係・主観性・語法化の程度という四つの観点を基準としている。同氏によれば、「叙事語体」における「故」は述語の前に置かれ、小文を導入し、表現する論理関係は因果である。また

論理関係の客観性は強く、語法化の程度は低い。それに対し「議論語体」では主語の前に置かれ、複数の文を導入可能であり、表現する論理関係は因果、対比、解説、転題等である。また論理関係の主観性が強く、語法化の程度は高い、としている。「故」が談話連結成分となる過程については、张赖 2014 に同意している。

これらの先行研究により、「故」の種々相は概ね見渡すことができる。しかしながら、結局「故」はいかなる機能を持つ語なのかは依然として把握できない。本研究では、先行研究を参考としつつも、独自の観点での整理を試みる。

3. 仮説の提示

本稿は「故」の機能について以下の仮説を提出する。

【「故」の機能についての仮説】

「故」の基本的な機能は、前件が成り立つことを前提に、そこから帰結を導出することである。その導出の方式は大きく二つに分けることができる。

①垂直的導出：前件から後件を直接論理的に導出する。前後の論理関係が比較的密接であり、前件は後件の理由となる。このような「故」は因果関係を表す文法機能を持つ。談話機能としては、後件の事柄を強く押し出し、対者を説得する語気を持つことがある。この談話機能を「説服」と名付ける。

②隣接的導出：共通の話題や平行的構造を有する段落を導出し、議論を展開する談話機能。これを「展開」と名付ける。

4. 用例の解釈

本節では「故」の用例を上述の枠組みに従って分類し、用法を分析する。

4.1 垂直的導出

4.1.1 因果関係

まず、単純に因果関係を表している例を挙げる。

(6) 伍子胥者、楚人也。名員。員父曰伍奢。員兄曰伍尚。其先曰伍舉、

以直諫事楚莊王、有顯、故其後世有名於楚。(『史記』伍子胥列伝)
(伍子胥という人は、楚の人である。名は員。員の父を伍奢といい、員の兄を伍尚という。彼の先祖は伍挙といい、直諫を以て楚の荘王に仕え名を立てたため、その子孫たちは代々楚の国では有名であった。)

「故」の前件から導き出される帰結が後件に置かれており、両者の間に因果関係を読み取ることができる。

4.1.2 情報構造

次に、談話の情報構造に着目しながら用例を分析してみよう。

(7) 子路問、「聞斯行諸？」子曰、「有父兄在、如之何其聞斯行之？」冉有問、「聞斯行諸？」子曰、「聞斯行之。」公西華曰、「由也問聞斯行諸、子曰『有父兄在』。求也問聞斯行諸、子曰『聞斯行之』。赤也惑、敢問。」子曰、「求也退、故進之。由也兼人、故退之。」(『論語』先進)
(先生はおっしゃった。「求は控えめだから背中を押してやり、由は人を凌ごうとするから抑えてやったのだよ。」)

この例でも「故」は (6) と同じく因果関係を表していると解釈できる。後件「進之」「退之」の理由がそれぞれ「求也退」「由也兼人」として前件に置かれている。ここで注目すべきなのは、孔子が自分の行った行為の理由を説明することが発話の目的となっていることである。即ち情報構造としては、後件「進之」「退之」は聞き手(公西華)にとって旧情報なのである。この情報構造を「新 — 故 — 旧」と表そう。

次に引く例も「新 — 故 — 旧」の情報構造を示している。

(8) 至陛、秦舞陽色變振恐、群臣怪之。荊軻顧笑舞陽、前謝曰、「北蕃蠻夷之鄙人、未嘗見天子、故振慴。〈…〉」(『史記』刺客列伝)
(階段の前に来ると、秦舞陽は顔色を変えて震えあがったため、並み居る臣下たちは怪しんだ。荊軻は振り向いて舞陽を笑い、進み出て謝った。「北の蝦夷の田舎者でございまして、天子様にお目にかかったこととてなく、これがため恐れおののいておるのでございます。」)

「秦舞陽色變振恐」とある通り、その場に居合わせる人々は秦舞陽が戦慄していることを目で見て知っているため、「故」の後件「振慴」は聞き

手にとって旧情報といえる。前件が長く、後件がごく短いことからも、前件の情報価値が高いことが示唆される。(7)(8) は (6) と異なり発言中に現れるが、そのような「故」が「新 — 故 — 旧」型の情報構造を成している例は多く観察される。

次に引くのは自説を開陳して相手を説得する文脈で用いられている例であり、やはり同型の情報構造を見て取れる。

(9) 虞卿聞之、入見王曰「此飾說也、王脊勿予。」樓緩聞之、往見王。王又以虞卿之言告樓緩。樓緩對曰「不然。虞卿得其一、不得其二。夫秦趙構難而天下皆說、何也。曰『吾且因彊而乘弱矣』。今趙兵困於秦、天下之賀戰勝者則必盡在於秦矣。故不如亟割地為和、以疑天下而慰秦之心。不然、天下將因秦之彊怒、乘趙之獘、瓜分之。趙且亡、何秦之圖乎。故曰虞卿得其一、不得其二。願王以此決之、勿復計也。」(『史記』平原君虞卿列伝)

(虞卿はこれ(樓緩の言葉)を聞くと、趙王にお目通りして言った。「あれはうわべを飾った話です。王様、くれぐれも(秦に土地を)与えてはなりません。」樓緩はこれを聞くと、王へお目通りに行った。王は虞卿の言葉を樓緩に告げた。樓緩は答えた。「間違っています。虞卿は一を得て二を得ておりません。そもそも秦趙の関係が険悪になれば天下がそろって喜ぶのは何故か。それは『強者を利用し弱者を凌いでやろう』という魂胆です。いま趙軍は秦に苦しめられております。天下で戦勝を祝う使者はみな秦に集まります。ですから速やかに土地を割譲して和平を取り結び、天下に疑惑を持たせて秦の心を慰めるのが一等です。さもなくば、天下は秦の強大さを利用し、趙の窮状に乗じ、趙を分割することでしょう。趙が滅びなんとしている時に、秦をどうこうできますでしょうか。さればこそ『虞卿は一を得て二を得ていない』と申し上げたのです。王様、どうかわたくしの言をもとにご決断を。お考えをお改めになりませぬよう。」)

ここではまず主張(結論)「虞卿得其一、不得其二。」を述べ、論拠を示した後、自分の発言を引用する形で結論(主張)を示している。当然ながら聞き手の趙王にとって「故」の後件は旧情報に、前件即ち論拠の部分は

新情報に属する。

(10) 如是、則上下俱富、交無所藏之。是知國計之極也。**故**禹十年水、湯七年旱、而天下無菜色者、十年之後、年穀復孰、而陳積有餘。(『荀子』富国)

(こうすれば、上下ともに富み、お互いに隠すことがなくなる。これぞ国家経済を知ることの極致である。だから禹の時代に洪水が十年続き、湯の時に旱が七年続いても天下に栄養失調の者なく、十年後には穀物が再び稔り、余りあるほど堆く積み上がったのである。)

この例では禹・湯の故事が後件に置かれており、それは読者にとって旧情報であると想定されていると考えられる。禹や湯の統治が成功した理由を述べる形になっているが、語り手の意図は自説(前件)を聞き手に納得させることにあり、後件に故事を配することで自説を補強していると考えられる。「かの禹や湯の時にこのようなありさまだったのは、(前件部分)という事情があればこそである」という語気である。

このような「故」に张赪 2014 は「挙例」機能を認めている。それは誤りではないが、张赪 2014 が「挙例」の用例として挙げるものは全て垂直的導出で「新 — 故 — 旧」の情報構造を持つ類型に包摂することができる。

なお、ここまで既知の情報を導く「故」を見てきたが、前提をもとに新情報を推論する例も存在する。例えば (9) の一部の

(11) 今趙兵困於秦、天下之賀戰勝者則必盡在於秦矣。**故**不如亟割地爲和、以疑天下而慰秦之心。(『史記』平原君虞卿列伝)

は、この部分を局所的に見れば前件を前提としてこれからどうすべきかを述べているため、新情報を導いていると判断できる。また、(6) は後件が新情報であるとも、因果関係を含めたこの文全体が新情報であるとも解釈できる。

4.1.3 談話機能

4.1.2 では、「故」の用いられる談話が「新 — 故 — 旧」の情報構造を持つ例を確認した。「故」がこのように用いられることを前提とするならば、本来対者にとって新情報である自説を「故」の後件に配することで、あたかもそれが既知の事柄であるかの如く装い、聞き手に押し付けることが可

能となるであろう。次に挙げるのはそのような例であると考えられる。

(12) 孟子對曰、「地方百里而可以王。王如施仁政於民、省刑罰、薄税斂、深耕易耨、壯者以暇日修其孝悌忠信、入以事其父兄、出以事其長上、可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵矣。彼奪其民時、使不得耕耨以養其父母、父母凍餓、兄弟妻子離散。彼陷溺其民、王往而征之、夫誰與王敵？故曰、『仁者無敵。』王請勿疑！」（『孟子』梁恵王上）

（さればこそ「仁者敵無し」と言うのです。）

この「仁者無敵」が王にとって旧情報であるか否か俄かに判ずることはできない。孟子が常々このような主張をしていたのを王は聞いていたかもしれないし、当時の格言だったのかもしれないし、さらには孟子が王に対しこの説を述べたのはこれが初めてだったかもしれない。しかしこのような談話類型の中に置かれると、「仁者無敵」が王にとって既知の言説であると想定されているような語気を生ずることは事実である。だとするならば、孟子がここで自説を既知の言説、即ち当然の言説として王に押し付けていると見ることも可能である。

これに関連して、平田 2009:12 には次のような記述がある。

(13) 清代の学者宋翔鳳（一七七六 ― 一八六〇）は、一般的に戦国時代の文献で「故曰（故に曰わく）」「是故（是の故に）」を冠した語句は、古いことばの引用だと説く（『過庭録』巻一四）。この宋翔鳳の指摘は、もともと注釈的な性格の強い文献（『管子』形勢解、『韓非子』解老篇など）の場合、かなりよくあてはまる。今本『孫子』はどうかというと、「故曰」が五例でてくる。有名な一例をあげておこう。

その例というのは (14) である。

(14) 故曰、知彼知己者、百戰不殆。不知彼而知己、一勝一負。不知彼不知己、每戰必殆。（『孫子』謀攻）

（さればこそ、「彼を知り己を知る者は、百回戦っても危うくない。彼を知らずして己を知っているだけでは、勝ったり負けたりする。彼を知らず己を知らなければ、戦うたびに必ず危険に陥る」と言われるのである。）

ここでは波線を付した部分で押韻しており、古い言葉の引用である可能

性がある。平田氏も指摘しているが、荻生徂徠『孫子国字解』は古語の引用としている⑦。

「故（曰）」の導く言葉が古語なのか発話者の自説なのかを明確に判断することはできない。次の例も両方の可能性が考えられる。

(15) 凡人莫不好言其所善、而君子爲甚。故贈人以言、重於金石珠玉。觀人以言、美於黼黻文章。聽人以言、樂於鐘鼓琴瑟。故君子之於言無厭。（『荀子』非相）

（一般に、人は自分が良いと思ったことを言いたがるもので、君子は特にそうである。だから人に言葉を贈れば金石珠玉より貴重で、人に言葉を見せれば鮮やかな刺繍より美しく、人に言葉を聞かせれば鐘鼓琴瑟よりも楽しい。だから君子は物を言って飽きないのだ。）

一番目の「故」⑧は前件で一つの命題を示し、それを前提として、君子の具体的な行動を後件で述べている。注目したいのは二番目の「故」で、これは君子の具体的な行動を前提とし、そこから導かれる帰結が後件で述べられているが、「君子之於言無厭」が全体の総括にもなっている。これが書き手独自の主張なのか、既知の言説なのか、やはり判断する材料はないけれども、「故」が後件の命題を際立たせていることは確かである。

4.1.4 小結

以上の分析から得られる見解をまとめよう。「故」は前件の理由から後件の帰結を導き出す機能を持つが、情報構造としては後件が新情報の場合も旧情報の場合もあり得る。「新 — 故 — 旧」型のうち、いくつか場合は、自説の反復や故事・古語の引用による説得力の強化が「故」の使用意図であると考えられる⑨。また、時に全くの新情報である自説を「故」の後件に置き、既知で当然の事柄のように装っている例も存在する可能性がある。このように自説の説得力を強化する談話機能を本稿では「説服」と名付ける⑩。これらを垂直的導出と呼ぶのは、前件から後件が直接論理的に導き出される感覚でこの用法を理解できるからである。

4.2 隣接的導出

4.2.1 論理関係が読み取れるもの

次に隣接的導出である。本研究が隣接的導出と目するのは (16) のよう

な例である。

(16) 君子曰、學不可以已。青、取之於藍、而青於藍。冰、水為之、而寒於水。木直中繩、輮以為輪、其曲中規、雖有槁暴、不復挺者、輮使之然也。故木受繩則直、金就礪則利、君子博學而日參省乎己、則智明而行無過矣。故不登高山、不知天之高也。不臨深谿、不知地之厚也。不聞先王之遺言、不知學問之大也。干、越、夷、貊之子、生而同聲、長而異俗、教使之然也。(『荀子』勧学)

(だから木は墨縄を当てられれば真っすぐになり、金属は砥石にかけられれば鋭くなり、君子は広く学んで日に何度も己を反省すれば、智は明晰になり行いに過ちがなくなる。従って、高山に上らなければ天の高いことはわからず、深い谷に臨まなければ大地が厚いことはわからず、先王の残した言葉を聞かなければ、学問の偉大さは分からない、というわけである。)

二番目の「故」に着目すると、「木は墨縄を当てられれば真っすぐになる」等のことが「高山に上らなければ天の高いことはわからない」等のことの理由になっているとは言い難い。しかし前段後段を「X すれば Y になる」「x しなければ y にならない」と抽象化すると、談話構造の対称性が浮かび上がってくる。この両者を「ゆえに」で結びつける推論は、論理学的には問題であるが、自然言語における推論として、あるいは修辞としてなら成り立つであろう。この「故」[11]について张亚茹 2016:62 は (17) のように説明している。妥当な見解である。

(17) 例(10)以譬喻阐述“学不可以已”的道理,“故”前各句从正面设喻,“故”后各句则从反面设喻,正反对照,增强了说理的力度。

(例 (10)(本稿の (16) のこと引用者注)は「学不可以已」という道理を比喩によって明らかにしている。「故」の前の各文は正面から喩え、後ろの各文は裏面から喩え、表裏照らし合わせることで説得力を強めている。)

類例として (18) が挙げられる。

(18) 積土成山、風雨興焉。積水成淵、蛟龍生焉。積善成德、而神明自得、聖心備焉。故不積蹞步、無以至千里。不積小流、無以成江海。(『荀子』

勧学）

（土を積み重ねて山を成せば、そこに風雨が起り、水を積み重ねて淵を成せば、そこに蛟龍が生じ、善を積み重ねて徳を成せば、優れた才知が自然と得られ、聖人の心もその身に備わる。従って、半歩半歩を積み重ねてゆかなければ千里の道を歩みとおすことはできないし、小さな流れを積み重ねてゆかなければ川や海を作ることはできないというわけである。）

これの前件は何かを「積む」こととその結果、後件は何かを「積まない」こととその結果を述べている。内容的に前後が表裏一体となっているのみならず、表現の上でも対称性が一目瞭然となっている。

張赫 2014:31 はこれを「対比」と規定している。対比がなされていることは確かであるが、本稿は「故」そのものに前後を対比せしめる機能があるとは考えない。むしろ、「P が真ならば Q は真。従って P が偽ならば Q は偽」という論理・論法であって、前件が成り立つことを前提に後件を導き出すという「故」の基本的な機能に沿った用例であると解釈したい。本例を垂直的導出に分類しなかったのは、前後の構造が対称的になっている点が、これから検討するような必ずしも前後の論理関係が明らかでない諸例と共通しているためである。談話の構造の点で垂直的導出の諸例とは異質なところがあるのである。

次に示す例では、談話の構造を見やすくするために改行等の処理を施してみる。

(19) 人之性惡、其善者偽也。（← 主張）

今　人之性、生而有好利焉。順是、故爭奪生而辭讓亡焉。
　　生而有疾惡焉。順是、故殘賊生而忠信亡焉。
　　生而有耳目之欲、有好聲色焉。順是、故淫亂生而禮義文理亡焉。

然則　從人之性、順人之情、必出於爭奪、合於犯分亂理、而歸於暴。

故　必將有師法之化、禮義之道、然後出於辭讓、合於文理、而歸於治。

用此觀之、然則人之性惡明矣、其善者偽也。（← 主張）（『荀子』性悪）

（してみれば、人間本来の性情に従うと必ず争いが生じ、秩序紊乱を

来し、荒廃という結果を招く。ゆえに師の教えや規範による感化、礼義による導きがあってこそ、譲り合いの精神が生じ、秩序が整い、平安に至るのである。）

本例では、要するに人の性に従うと良からぬことに出・合・帰する、人の性に従うことをしないと良きことに出・合・帰する、ということが語られている。ここでも「故」の前後で談話の構造が平行している。

4.2.2 論理関係が明確でないもの

以上の用例では「故」の前後にある種の論理関係を読み取ることができたが、論理関係が明確でない用例も存在する。(1) がまさにそれであったが、これを前後の文脈を含めて長めに引用してみよう。ここでも改行等の処理を施しておく。

(20) 孫子曰、

地形有通者、有挂者、有支者、有隘者、有險者、有遠者。

我可以往、彼可以來、曰通。*通形者*、先居高陽、利糧道以戰、則利。

可以往、難以返、曰*挂*。*挂形者*、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。

我出而不利、彼出而不利、曰*支*。*支形*者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、利。

隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之。

險形者、我先居之、必居高陽以待敵。若敵先居之、引而去之、勿從也。

遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利。

凡此六者、地之道也。將之至任、不可不察也。

故兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。

凡此六者、非天之災、將之過也。

夫勢均、以一擊十、曰*走*。

卒強吏弱、曰*弛*。

吏強卒弱、曰*陷*。

大吏怒而不服、遇敵懟而自戰、將不知其能、曰*崩*。

將弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陳兵縱横、曰*亂*。

將不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰*北*。

凡此六者、敗之道也。將之至任、不可不察也。（『孫子』地形）

（戦地の形状には通りやすいもの、障害があるもの、枝道があるもの、狭いもの、険しいもの、遠いものがある。〈…〉この六者は全て、地形に関する道理である。［これらを把握することは］将軍の最大の責任であり、よくよく考慮せねばならない。

そのうえで軍隊には走るもの、弛むもの、陥るもの、崩れるもの、乱れるもの、逃げるものがある。〈…〉この六者は全て、敗北に関する道理である。［これらを把握することは］将軍の最大の責任であり、よくよく考慮せねばならない。）

この箇所は最初に六つの概念が示され、それらの解説が行われたあと、その六つの概念を総括する（「凡」以下）という構造をとっている（ただし「故」の後では六つの概念が示された直後に一度総括が行われている）。この構造に着目すれば、「凡此六者、地之道也、將之至任、不可不察也。」までが一つの談話で、「故」以下はもう一つの新たな談話になっていることが理解される。

新たな談話ではあるが、「故」が全く別の話題を導き出しているのかといえば、そうではない。「將之至任、不可不察也。」という文が前後に共通して現れるように、将たる者の責任を論じている点は共通しているのである。さらに地形篇全体を見渡してみれば、後文で「視卒如嬰兒、故可與之赴深谿。」［兵卒を赤子のように扱うからこそ、彼らとともに深い谷にも赴くことができる。］の如く兵卒との接し方を論じており、さらに篇末近くの「知敵之可擊、知吾卒之可以擊、而不知地形之不可以戰、勝之半也。」［敵が攻撃できることが分かり、我が兵卒が出撃できることが分かっていても、戦えるような地形でないことが分からなければ、勝利は半分しか得られない。］という言葉がよく表しているように、敵軍・自軍の状態とともに地形を正確に把握することの重要性を地形篇は説いているのである。(20) の「故」はそのような大きな話題の中で次なる論点に話を移しているに過ぎない。

(21) は张亚茹 2016:63 が話題転換の例として挙げる用例である。

(21) 凡聽、威嚴猛厲、而不好假道人、則下畏恐而不親、周閉而不竭。

若是、則大事殆乎弛、小事殆乎遂。
和解調通、好假道人、而無所凝止之、則姦言並至、嘗試之說鋒起。若是、則聽大事煩、是又傷之也。
故　法而不議、則法之所不至者必廢。職而不通、則職之所不及者必隊。
故法而議、職而通、無隱謀、無遺善、而百事無過、非君子莫能。
故　公平者、聽之衡也⑫。
　　中和者、聽之繩也。
　　其有法者以法行、無法者以類舉、聽之盡也。
　　偏黨而無經、聽之辟也。
故有良法而亂者、有之矣。有君子而亂者、自古及今、未嘗聞也。
傳曰「治生乎君子、亂生乎小人。」此之謂也。(『荀子』王制)
(一般に、政策提言を聞くとき、厳しい態度で臨み、寛容な態度で人を許すことを好まないならば、下々の者は畏怖して近づかず、押し黙って意見を言いつくさなくなる。そうすると大きな事にはゆるみが生じ、小さな事は失敗に終わりがちである。
和やかな態度で臨み、寛容な態度で人を許すことを好んで歯止めをかけないならば、悪意ある建言が続出し思いつきの意見が群がってくるようになる。そうすると意見聴取が大掛かりになり仕事も煩雑になり、これはこれで問題である。
それゆえ、法を整備しても議論を尽くさなければ、法の手の届かぬ部分が必ず駄目になるし、個々の職権を設定しても全体を見渡していなければ、職権の及ばぬところが必ず破綻する。そのため、法を整備した上で議論を尽くし、職権を設定するが全体にも通じ、下々に密かな企みや埋もれた名案が無いようにし、しかも何を行っても誤りがないというようなことは、君子でなければ実現できる者はいないのである。
そこで、公平が意見聴取のはかり、中和が意見聴取の物差しであり、適用できる法があれば法によって行い、なければ類例を根拠に処理するのは、意見聴取の行き届いた在り方であり、依怙贔屓して一定の原則がないのは、意見聴取の偏った状態である。

ればこそ、良法がありながら社会が乱れることは確かにあるが、君子がありながら社会が乱れたという話は古来存在しないのである。「治は君子より生じ、乱は小人より生ずる」という言葉があるが、このことを言ったものである。）

まず二番目の「故」は前後が「法而不議／法而議」「職而不通／職而通」の如く表裏をなす表現となっており、(18)(19) に類似する。また四番目の「故」は談話の末尾に位置しており、全体を総括する文を導いているから、垂直的導出の「説服」機能を有する「故」であると判断してよい。

問題は一番目と三番目である。一番目の「故」の前では「聽」（政策提言を聞くこと）が話題となっていたのに、後では「法」（法律）「職」（職権）が話題となっており、転換がなされているかの如くである。しかし、张亚茹 2016:63 は引いていないが、(21) のさらに前の部分を読むと、

(22) 聽政之大分。以善至者待之以禮、以不善至者待之以刑。兩者分別、則賢不肖不雜、是非不亂。（『荀子』王制）

（政策提言を聴く際の大綱。善きことを進言してくる者は礼を以て待遇し、不善を進言してくるものには刑罰を加える。この二者が区別されれば、賢者・愚者が混じり合わず、是非も混乱しない。）

というように、政策提言をしてくる者を区別・整理することの重要性が述べられている。してみると、「法」「職」というのは提言者を整理する基準として挙げられていると考えられ、従って巨視的には一つの話題が続いているといえる。

三番目の「故」の後では、再び「聽」に話題が戻っているようであるが、「法」や「職」が忘れ去られたわけではない。法律や職権は客観的な基準であるが、「公平」「中和」は倫理的な基準である。どちらも「聽」のよりどころであるという点では共通している。制度の上でも、為政者の意識の中でもよりどころとなるものが必要で、しかも前者だけがあればよいのではなく、正しい意識を持ち制度を然るべく活用できる君子がいて初めて国が治まる、と主張しているのである。

(21) は政策提言を処理する方法を、あるいは制度の面に、あるいは意識の面に光を当てながら論じているのであり、「故」は話題というより論点

を切り替えていると言った方がよい。それも、前段と切り離された論点に移行するのではなく、前段を踏まえた上で次の論点に移っているのである。前段を議論の前提としているという点において、「故」の基本的機能はここでもなお残存しているといえる。

(23) で太字にした「是故」の二番目は、马建忠 1898/1983:309 が「発語」の例として挙げている。文脈が分かるよう、これも長めに引いてみよう。

(23)『易』曰、「自天祐之、吉无不利。」子曰、「祐者、助也。天之所助者、順也。人之所助者、信也。履信思乎順、又以尚賢也。是以自天祐之、吉无不利也。」子曰「書不盡言、言不盡意。」然則聖人之意、其不可見乎。子曰「聖人立象以盡意、設卦以盡情僞、繫辭焉以盡其言、變而通之以盡利、鼓之舞之以盡神。」乾坤其易之緼邪。乾坤成列、而易立乎其中矣。乾坤毀、則无以見易。易不可見、則乾坤或幾乎息矣。

是故形而上者謂之道、形而下者謂之器、化而裁之謂之變、推而行之謂之通、舉而錯之天下之民、謂之事業。

是故夫象聖人有以見天下之賾、而擬諸其形容、象其物宜、是故謂之象。聖人有以見天下之動、而觀其會通、以行其典禮、繫辭焉以斷其吉凶、是故謂之爻。極天下之賾者、存乎卦。鼓天下之動者、存乎辭。化而裁之、存乎變。推而行之、存乎通。神而明之、存乎其人。默而成之、不言而信、存乎德行。(『周易』繫辞上)

(『易』には「天の祐けがある。吉であって万事よろしい」とある(大有上九)。これについて孔子は「祐とは助である。天が助けるのは天道に従順な者、人が助けるのは誠実な者である。上九の人は誠実の徳を実践して天道に順おうとし、下位の賢人を尊ぼうとする。だから天の祐けがあって、吉にして万事よろしいのである」と言っている。孔子はまた「書かれたものは口で言おうとしていることを尽くし得ず、言い表したことも考えを十分に伝えることはできない」と言っている。ならば聖人の考えは見極められないのか。孔子は「聖人は八卦の象を立てて心中の考えを尽くし、六十四卦を設けて物事の真偽を尽くし、卦辞・爻辞を繫けて言わんとする所を尽くし、陰陽の変化流通によって、何に運が向いているかを尽くし、人を鼓舞

し決断へ向かわせることで、奇跡のような易の働きを尽くしたのである」と言っている。乾坤こそは易の蘊奥と言えるだろう。乾坤が天地に分かれ列なり、易はその中間に成立する。乾坤がばらばらになれば易は見極められなくなるし、易が見えなくなれば、乾坤も働きをやめたようなものである。

そこで、現象を超越したものは道といい、現象として知覚可能なものは器といい、変化させつつ統御するのを変といい、これを推し進めて具体的な事案を解決するのを通といい、その効果を天下の民に及ぼすことを事業という。

そのうえで、象というのは、聖人が世界の複雑さを見て、その姿形になぞらえ最も適合した形象に象ったので、象というのであり、世界の事物の動きを見、それらの離合集散を観察し、一定の規則を見出してこれに説明の言葉を付け、それぞれの吉凶を判断したものであるから、爻というのである。世界の複雑さを極め尽くしたさまは卦に、世界の事物の動きを促進するさまは辞に、変化と制御は変に、具体的な解決は通に、奇跡を明らかにするのは運用する人間に、暗黙のうちに易の道を成就し、何も言わずただただ誠実であり続けることはその人の徳行に、備わっている。）

各段落で「信」「變」「通」「辭」「神」等の概念が用いられている点が共通しているが、特に重要な概念は「變」であろう。この世の変化に対し聖人がどのようなことを行い、変化がどのように易に現れるかを全体として述べているのである。三つの段落は同一の問題に関心をもちつつ、論点を少しずつ変えながらそれを論じているのである。従って、これらの「是故」を新たな話題を説き起こす「発語の辞」と見なすことはできない。

4.2.3 小結

以上見てきたように、比較的長い談話どうしを結び付ける「故」は、前段を前提として次の論点に移り、議論を前に進める役割を果たしている。このような談話機能を本研究では「展開」と名付ける。前後の論理関係が読み取れる場合もあれば稀薄な場合もあるが、いずれにせよ前後は同一の話題に包摂され、「故」はその範囲内で論点を変える働きを持っている。

談話の特徴としては、前後で構造が平行的になっていたり、いくつもの「故」が連続して使われたりすることが挙げられる[13]。これを隣接的導出と呼ぶのは、内容的・構造的に似た段落へ話を「ずらす」という感覚でこの用法を理解しうるためである。

5. まとめ

本節では本研究のまとめを行う。初めに本研究で得られた知見を要約し、次に先行研究との関係を整理し、最後に残された問題に触れることとする。

5.1 本研究で得られた知見

本研究では、「故」の基本的な機能を「前件が成り立つことを前提に、そこから帰結を導出すること」と規定し、導出の方式を大きく二つに分け、「故」の用例を整理した。

一つ目は垂直的導出であり、前件から後件を直接論理的に導出する。前後の論理関係が比較的密接であり、典型的には前件が後件の理由となる。このような「故」は因果関係を表す文法機能を持つ。「故」の後件には、語り手が既に述べた主張や故事・古語が置かれることがあり、このような場合、「新 — 故 — 旧」型の情報構造を示す。主張の反復、故事・古語の引用は自説の説得力を高める効果を持ち、時に聞き手にとって新情報にあたる自説を後件に置くことで、あたかもそれが既知の事柄であるかのように装い、自説を相手に押し付けていると見られる用法がある。そこではもはや因果関係を表すことに「故」の使用意図があるわけではなく、自説を強く打ち出すために「故」が使われていると考えられる。このような談話機能を本研究では「説服」と名付けた。

二つ目は隣接的導出であり、この場合「故」は共通の話題や平行的構造を有する段落を導出し、議論を展開するために用いられる。「故」の前後の論理関係は読み取れることもあれば明確でないこともある。後者の場合においても、完全に新しい話題に転換するのではなく、巨視的に見れば同一の話題に含まれる範囲内で論点を変えているに過ぎない。このような談話機能を本研究では「展開」と名付けた。

以上の垂直的導出と隣接的導出は截然と分かたれるわけではなく、(18)

のようにどちらに分類しても差し支えない用例もある。また、(21) を分析した際には、四つある「故」のうち四番目を垂直的導出と見なしたが、この談話では個々の「故」の使い方よりは、むしろ「故」を連続して使うことの方に修辞的な狙いがあると考えられる。俞樾 2005[2]:67 が (5b) で「彌見古人文氣之厚」と述べているのを想起したい。垂直的導出であれば「展開」機能はない、というわけではなく、「故」を連続して使用する談話の中にあれば十分そこに「展開」機能は認められる。

垂直的導出にせよ、隣接的導出にせよ、共通しているのは「前件が成り立つことを前提に、そこから帰結を導出すること」であり、本研究が「故」の基本的機能をここに見出したのは、この共通性に目をつけたためである。

5.2 先行研究との関係

本節では先行研究と本研究との関係を整理する。

まず「発語の辞」説である（『文心雕龍』、俞樾 2005[2]、马建忠 1898/1983、楊樹達 1928/2004）。本研究では「故」を「発語の辞」とは考えず、従来「発語」とされていた用法は、隣接的導出の「故」に帰属せしめた。そのような「故」はあくまでも段落と段落を結んでいるのであって、談話全体の始めに「故」が置かれたり、話を切り出すときに「故」と言ったりする例はない。

次に「則」とする説である（王引之、楊樹達 1928/2004）。本論では言及しなかったが、例えば王引之が引く例は次のようなものである（本文は王引之による。pp.115-116）。

(24) 韓魏戰而勝秦、則兵半折、四境不守。戰而不勝、以亡隨其後。<u>是故韓魏之所以重與秦戰、而輕為之臣也。</u>（『戦国策』斉策一）
（だから（？）韓魏が秦と戦うのを恐れ、秦に臣従することを易しいことと考えている理由なのです。）

王引之はこの「是故」を「是則」に読み替えるのである。確かに、あとに続くのは名詞句であるから、「是故」のままでは読みづらい。しかし、「是則」に読み替えれば文意が通ずる一方、「故」を衍字と考えて除去しても文意は通ずるのであって、この「是故」を前にしていかなる判断を下すべきか、決め手を欠くと言わざるをえない。先行研究が「則」と読み替えて

いる例には、用例ごとに個別の問題があることも考えられる。本研究では、「則」に読み替えられると指摘されている例があることを記すに留め、個別の検討は他日に期したい。

続いて王引之の「事を敷衍する」という説であるが、これは『周髀算経』趙爽注の「故者、申事之辭。」という記述を引いて「常語也。」［通常の用法である。］というのみである。似た考え方として、兪樾 2005[2]:81 は「上を承ける」機能を、马建忠 1898/1983:308 は「上を受けて下に敷衍する」機能を認めている。これら三者の説は、本研究が「故」の基本的機能を「前件が成り立つことを前提に、そこから帰結を導出すること」と規定しているのと重なる。本研究は、三者の説と同じ土台に立った上で、個々の用例を詳しく分析し、「故」の機能を整理したということになる。特に、马建忠 1898/1983:309 の「故「故」字必根上文。」［従って「故」字は必ず前の文を踏まえる。］という説は重要である。

現代の研究に目を移すと、张赫 2014 の七分類は、大約、因果・順承・挙例は垂直的導出に、解説・換言・対比・転題は隣接的導出に振り分けることができる。もっとも、分類は個別に検討すべきであることは言うまでもないが、重要なのは、张赫 2014 ほど細かく分けずとも、大きく二つに分けることで「故」の実態が一層理解しやすくなるということである。

张亚茹 2016 は文体と「故」の用法との関係を論じているが、本稿ではその説の検討は行わなかった。

古今にわたる先行研究と本研究との一番の違いは、本研究では「故」が結びつける前後の段落が共通の話題を持っていると考えている点である。张赫 2014:31 は「転題」に関して「新的话题可以和前面的话题属于同一个话题组，也可以是相互独立。」［新しい話題は前の話題と同一の話題グループに属することも、相互に独立していることもある］と述べているが、本研究では「後段は前段と同一の話題グループに属し、その中で論点が変わっている」と考えるのである。

以上、先行研究と本研究との関係を整理した。従来の研究と比較すると、本研究は最も簡潔にして、しかも用例の実態をよく説明できる図式を提示していることになる。

5.3 残された問題

本研究では、「故」に垂直的導出・隣接的導出の二つの機能を認めたが、これらが相互にどのような関係にあるかは深く追究しなかった。先行研究でも、张赖 2014:33 は「故」が連結する両成分が長大となり、構造が複雑になるにつれて、両成分の意味上の関係性が薄れ、「故」は談話連結成分となるに至ったと主張し、张亚茹 2016:63 もこれに従っているが、証明はなされていない。筆者の憶測を述べるならば、「前件の命題が成り立つならば後件の命題が成り立つ」という垂直的導出が、「前段の論法が成り立つならば後段の論法が成り立つ」というように、命題レベルではなく議論レベルに拡張されることで隣接的導出が派生したと考えているが、それは有り得べき説明に過ぎず、証明したわけではない。証明は困難であろうが、「故」の用法に通時的な変化があるのかどうか、確認してみる余地はあるだろう。

また、本研究ではさまざまな文献の用例を同列に扱っており、且つ文献の選定にも特段の基準があるわけではない。张亚茹 2016 のような、文体・文献ごとの個別的研究も行う価値がある。

とはいえ、上述の如く従来と比べ簡潔な図式を提示することができたのは、本研究の成果である。今後「是以」「然則」「於是」など他の接続詞の機能を考える上でも、本研究の観点は参考になるであろう。そのように他の接続詞に研究の範囲を広げてゆくことで、上古漢語の談話進行がどのようになされていたかを整理・分類することが可能になるのではなかろうか。

〈注〉

①本文は Ames 1993:146 による。金谷 2000:133 は「非天之災」に作る。以下、特段の注記をせぬ限り、『孫子』本文は金谷 2000 による。

②平田 2009:153-154 は、金沢文庫旧蔵『群書治要』巻 33 所引の『孫子』を底本としており、金谷 2000:44-46 に基づく (4) と比べると本文に異同があるが、「是故」「故」にまつわる議論には影響しない。

③「趙爽注『周髀算経』曰「故者、申事之辭。」常語也。」「故、猶「則」也。」(p.115)

④俞樾 2005[2]:81「故者、承上之詞也；而古人亦或用以發端。」马建忠 1898/1983:308-309「其承上而申下之辭、則惟「故」字。」「『易』繫辭云「是故夫象、聖人有以見天下之頤(ママ)、而擬諸其形容、象其物宜、是故謂之象。」下「是故」是緣上之辭、上「是故」則發語之辭。」繫辞伝の用例は (23) で分析する。
⑤『文心雕龍』章句「至於『夫惟蓋故』者、發端之首唱。」
⑥七つの機能についての张赫 2014 による定義を要約すれば以下の通りである。

因果：主に因果関係を表示する。また結果の出現やある種の現象の間の必然的な繋がりを強調することもある。

順承：前の文の述べる所に続いて次へと説く。前の文の内容を引き継いだり、内容をさらに明らかにしたりすることもある。

挙例：「故」の後に「故」の前で述べた内容の具体的な実例を挙げる。

解説：前の文で一つの意見を提出し、後の文で更に詳細な解釈を行う。

換言：前の文で述べた内容を別の形で伝える。

対比：「故」の前後で相反した内容を述べる。一つのテーゼの対立面であったり、一つの事柄の二つの側面であったりすることもある。

転題：話題や論点が変化し、「故」の後に新しい話題や議題を導入する。新しい話題は前の話題と同一の話題グループに属することも、相互に独立していることもある。

⑦「此段は古語を引て一篇の意を結ぶなるべし、曰と云字あるを以て見れば、古語を引たるなり、故と云字あるを以て見れば、一篇の意を結びたるなり、」(p.67)
⑧张赫 2014:30 はこの「故」に「解説」の機能を認めているが、これはある命題を前提に個別具体の事柄を演繹している例であり、推論の一類型として捉えればよく、敢えて一類を立てるには及ぶまい。二番目の「故」は帰納型である。
⑨ (7) においても、「進之」「退之」は言説ではないけれども、その行為の正当性が主張されていることになる。
⑩本節で取り上げた「故」の用法に似た例が、英語や現代中国語にもみられる。大堀 2011:75 は、談話中における that's why の使われ方を分析し、

「that's why が表す理由・原因は、現実世界での実質的な因果性ではなく、既知の命題を直前に発せられた『前件』に対する『帰結』として新たに関係づけるという心的プロセスの明示化となっていると考えられ」、「新たに関係づける」とは「妥当性・重要性を新たに主張・確認する」ことであり、「話し手がそれまでの談話文脈内で主張してきた何らかの情報を再び提示して、一連の談話で言われた内容に対する帰結としてその妥当性を強化するという行為である」と論じている。この表現は談話に「話し手にとってのまとめ、あるいは結末をつけるもの」であるという（p.76）。ただし that's why が導く命題はそれまでの発話で明示的に述べられていないこともあり、その場合 that's why は「談話の当事者全員にとって既知であるとは限らないが、ある情報を話し手にとっては既知のものとして（あるいは真であることが前提となったものとして）装って提示する効果を持つようである。それは言わば「後追い的な自己正当化」と解釈することができる」としている（p.77）。本研究が「故」の後件に新情報の自説を置きながらそれを既知の事柄と装っている場合を想定するのは、大堀 2011 の知見を踏まえたものである。

また今井 1999 の示す「所以」の用法には、話題の終結部分に用いられ、「判断・主張・意見・推論などをまず述べて、次に具体的な説明、事例などを続け、最後に再び主張などが、最初の時とほぼ同じような語句によって示される、というパターン」（p.136）が存在する。

⑪张赫 2014:30 はこれを「換言」の例とする。

⑫「聽之衡也。」、原文は「職之衡也。」に作る。劉台拱に従って改めた。

⑬今井 1999 では、「所以」が次々に繰り出され、先行する因果関係の後件を前件として次の因果関係を形成する例や、「所以」が次々に繰り出されるが、因果関係を表しているとは考えづらい例が報告されている。後者について今井氏は「前後を繋ぎながら、話の展開と終結への道筋をつけている」（p.139）と考えている。

〈参照文献〉
今井敬子　1999「談話における“所以”の用法と機能」、『人文論集』第 50 巻第 1 号、静岡大学人文学部：129-143
大堀壽夫　2011「談話と認知からみた「理由」：対照分析に向けて」、『中国語学』第 258 号、日本中国語学会：65-83
金谷治　2000『新訂孫子』東京：岩波書店
平田昌司　2009『『孫子』――解答のない兵法』東京：岩波書店

马建忠　1898/1983《马氏文通》北京：商务印书馆
楊樹達　1928/2004《詞詮》北京：中華書局
俞樾　2005《古書疑義舉例》，俞樾等《古書疑義舉例五種》北京：中華書局
张亚茹　2016《语体差异与因果关系连词“故”》，《古汉语研究》2016 年第 4 期（总第 113 期）
张赖　2014《上古汉语连词“故”的篇章功能研究》，《古汉语研究》2014 年第 2 期

Ames, Roger 1993. *Sun-tzu: The Art of Warfare.* New York: Ballantine Books.

〈引用例出典〉
『周易』阮元校刻十三經注疏「周易正義」
『論語』阮元校刻十三經注疏「論語注疏」
『孟子』阮元校刻十三經注疏「孟子注疏」
『孫子』金谷治『新訂孫子』東京：岩波書店、2000 年
『荀子』漢文大系第十五巻『荀子』東京：冨山房、1978 年（増補 3 版）
『史記』點校本二十四史修訂本『史記』北京：中華書局、2014 年
『文心雕龍』詹英『文心雕龍義證』上海：上海古籍出版社、1989 年
『経伝釈詞』王引之撰・李花蕾點校『經傳釋詞』上海：上海古籍出版社、2014 年
『孫子国字解』荻生徂徠『孫子國字解』漢籍國字解全書第十巻、東京：早

稲田大學出版部、1928 年

【付記】本研究は卒業論文「上古漢語の接続詞「故」の文法機能と談話機能」を基礎とし、一部その記述を援用しているが、論旨は異なっている。全体の論旨は、2017 年 8 月 2 日、京都大学・東京大学中国語中国文学研究交流会にて行った発表「上古漢語の接続詞「故」の談話機能とその特徴」に基づいている。同会では平田昌司先生から直接ご意見をいただいた。ここに記して御礼申し上げたい。また、「垂直的」「隣接的」の概念は、齋藤希史先生が講義中に用いられた説明法に啓発を受けたものである。併せて御礼申し上げたい。